

7月・神戸

神戸市垂水区 瀬良英一

7年前の日記にこう記していました。『神戸阪急の画廊で、ブルーが印象的な気持ちいい絵に出会えた。』と。震災後の喪失感を抱えながら偶然出会った絵は、透明な空気と爽やかな風・穏やかでゆったりとした時を私達夫婦に届けてくれました。あれから、神戸阪急の画廊で森崎先生と作品そして、スタッフの皆さんとお会いする7月が私達の楽しみであり、大切な行事となりました。一方、これが我家夫婦の悩みの一つとなってしまったのです。私は「あのブルーが忘れられない。」自分の好きな絵が欲しい。」しかし、妻は「我家に合う絵が欲しい。」と。初めて手にした絵は、何故か朱赤の「パリ・セーヌ」でした。やっと念願のブルーを手にしたのは、三作品目。作品は、玄関・リビング・和室にと季節を味わいながら飾っています。森崎作品は、予想外？に和室にもピッタリとおさまるのです。私は同じ世代・同じ男性として森崎修太の魅力は“ダンディズム”だと思っています。この視点で、作品と先生ご自身を御覧になると、森崎修太の真の魅力が見えてくるのではないのでしょうか。妻は、「数年前から先生の絵に違う音色が加わった。」と、言います。きっと、取材の旅・個展で沢山のすばらしい人との出会いが変化をもたらしているのでは。さて、今年の7月神戸「モリサキズ・ワールド」でどんな女性(作品)が私を迎えてくれるのでしょうか。



「いつか旅したい！修太作品の地へ・・・」

茨木市 一ノ瀬登志枝

修太先生の絵が、わが職場の応接室に飾られていたのがキッカケで、修太先生とは知り合いました。毎年、夏が近づくと、職場の友と神戸での個展が楽しみで「今年はどんな作品かなあ～！」と心待ちにするようになりました。初めて修太先生の作品を鑑見た時、目の覚める様な美しい色彩と温かさに魅せられ、2年後には念願の宝物を手にすることができました。我が家の絵をみる度に、いつかこの地を旅したい！という気持ちができます。修太先生の作品を応援しながら、同時に私達にやすらぎと夢を与えて下さることに「ありがとう」と言わせていただきます。



堺市 藤谷重穂

今年も修太先生の季節がやってきた。私と一ノ瀬さんにとって7月のスケジュールは、一通の展覧会ご案内の手紙から始まります。「今年の夏は、土曜日にできればウインドウショッピングも楽しめそ～！」一ノ瀬さんとの会話は弾みます。もう～今から今年の新作が「タノシミ！」です。そして、いつも思う事は、いつか先生の描かれる素晴らしい風景をこの目で確かめに行きたい。そうです！いつかフランスに行ってみたくて夢んでいます



ある銀行の秘書室が職場のお二人！ 気の合ったコンビぶりはお仕事にもプライベートにもいかに発揮され、毎夏・暑い盛り！大阪での仕事を終えられてから神戸に駆けつけて下さいます。“修太の描く世界！を・訪ねるツアー” ポンジュール修太事務局としても実施したい。もし、いつか叶うならと願いつつ画家の？過密スケジュールに追われ、今だ <夢>の途中です。いつか、いつか・・・。



「男に合い通じる・・・絵！」

西宮市甲陽園 一瀬吉郎（談）

「ごちゃごちゃした‘絵’じゃない事。単純明快、スカッとした爽やかさ・・・その一点！に尽きる。」 そう、明言して下さるのは、長年、神戸で真珠のお仕事を手がけてこられた一瀬さん。「一見、一色に見える色だが、塗り込めら



れた質感や構図は、見てて気持ちいい！」全体を上手く組み合わせ、まとめるのは大変だろうナ？」約20年近く<修太作品>を、見守り支えて下さった、一瀬さんのコメントはキリリと暖かい。更に話は<画家・人物評>へとつづいた。「修太サンの絵は自分を正直に表現しとる。もともとお世辞言えない正直な人だからなあ・・・」修太先生の出身地、佐賀県に伝えられる、鍋島藩・葉隠れ精神の武士道に例えられ、そう評して下さった。静かに話される・・・一瀬さんの横顔にも、黙ってても通じる<男の美学>が、垣間見えた一瞬！でした。

文・いしざき

DM作品・紹介

森崎修太の視点でとらえた

今を生きる女性達の日常の風景。

誰を描くか！じゃなく

何を描くか・・・！

作品の前で見つめてみませんか？

「鏡の前で」 P10号



「黄金色の時」 F15号

光の美しさを表現した作品！観る人を不思議な満ち足りた気持ちにさせてしまう一点かもしれません。

「画家の視線」シリーズ



「チュニジアの少年」



日曜日の午後、ニースの海岸の椅子でのんびりとした風景を楽しんでる時だった。

「タバコ1本くれない？」と、まだ15~16才の少年がちょっと大人びた声で話しかけてきた。気取ってみてるわりには・・・タバコ吸うのは、まだ早い！年頃に見え「君の歳は幾つ？」と訊ねた。案の定、15才とのこと。彼はチュニジア人で「去年から家族で出稼ぎに来た！」と、自分のしわくちゃになったパスポートを見せてくれた。彼はなつっこい笑顔を絶やさず自分の家族の事や住んでた街フェスの話をしはじめた。決して生活は楽ではない様だけど、彼の澄んだ鶯色の目はこの南仏の光と自由な風に、とてもよく溶け込んでいる様で風景の一部に見えた。人間はどこに住もうがその土地にいかに同化するか！ではないだろうか。私の絵も、風景・人・光と同化しその空気感をいかに伝えるか・・・ではないだろうか。チュニジアの少年の鶯色の目を見て思った。



World Cup 日本 VS チュニジア戦
大きな感動を与えてくれました

チュニジアの風景・・・南仏ニースにも似て
とても素敵なおとこです！

お知らせコーナ

今後の「修太個展」予定

- '02 10/8 ~ 10/14 日・・・広島そごう
- '02 11/19 ~ 11/25 日・・・仙台三越
- '03 1/28 ~ 2/2 日・・・札幌三越
- '03 4/29 ~ 5/5 日・・・福岡三越

